



の話型分類に関わる研究成果について詳しく説明してくださり、その上、関敬吾の話型に基づいて改訂した『日本昔話の型』という著書を下さった。交流の時間は短かったが、私の学術研究は啓発を受け、先生の研究に対する姿勢から多くを学ぶことができた。

三週間の時間はまたたく間に過ぎ去った。味わい足りない気分だったが、「さよなら」を言わなければならない時が来た。訪問中、私の心の琴線に触れたことが数多くあった。小熊先生はご多忙中にもかかわらず、伝統的な日本料理を食べに連れて行ってくださった。彦坂さ

んは事細かに調査のスケジュールを立ててくださった。面談の度に譚静さんには流暢な通訳をしていただいた。そして、非文字資料研究センターの先生方と学生たちはいつも暖かく接してくださった。楽しく収穫に満ちた今回の研究訪問の旅は、私にとって一生忘れられない貴重な経験である。

訪問最後の日の夜明け、私は名残惜しい気持ちと共に宿泊先の国際寮、神奈川大学、白楽駅、横浜港を後にした。またこの美しい国との再会を期待している。

思い出の21日間

咸 瓊 恩
(漢陽大学校)



神奈川大学非文字資料研究センターの支援のおかげで、幸いにも私は神奈川大学が提供する学術交流の機会を得、漢陽大学からの交換研究員として、2015年1月26日から2月15日まで21日間の訪問研究を行った。

21日間という短い間だったが、東京大学、早稲田大学、東洋文庫、神奈川大学など、東京を中心に、日本で古典籍が所蔵されている重要な機関を訪れ、文献一冊一冊に目を通した。

日本の学者たちは、子弟書について詳しい論述を展開しているのみならず、大量の文献の発掘に努め、さらには、多くの子弟書に関する資料を出版している。民間に新しい文体が現れた時代に、西洋の文学観を取り入れた日本の学者たちは、西洋の観念を以て東洋文学を捉えることで、一般民衆の間で流行した戯曲や小説、ロマンス、弾詞(※)などを人文学研究において欠かせないものであると考えた。日本で所蔵されている中国伝来の子弟書の刊行は、比較研究において大変価値のあるものだ。長澤規矩也(1902-1980)と倉石武四郎(1897-1975)の旧蔵は、現在東京大学に収められ、「双紅堂文庫」及び「倉石文庫」となっている。東京大学東洋文化研究所双紅堂文庫所蔵の戯曲の鈔本と曲本の一部は復刻出版され、読者の要望を満たしてくれている。その中には多くの子弟書が含まれており、波多野太郎(1912-2003)によって『子弟書集』に収められ、復刻出版されている。

長澤規矩也は、1932年から1972年の間に6回にわたって中国を訪問し、北京の書店にて各種曲本を大量に購入している。長澤個人が所蔵していた数千冊の戯曲小説は、1950年代に東京大学東洋文化研究所に買い取られ、「双紅堂文庫」が設けられた。さらには、「双紅堂文庫分類目録」が編まれている。

倉石武四郎は、1920年代末、京都帝国大学助教授時代に北京に留学、中国古典籍を大量に購入した。さらに、馬廉らとの親密な交流から俗曲文献の収集にも関心を寄

せた。倉石が亡くなった後、子弟書を含む彼の蔵書は全て東京大学東洋文化研究所に移管され、「倉石文庫」となった。

澤田瑞穂(1913-2003)の旧蔵は、

現在早稲田大学図書館の「風陵文庫」に所蔵されているが、ここにも子弟書のテキストが含まれている。澤田は風陵書屋主人の号を称し、風俗文学の研究家として『宝巻の研究』等の著書を残している。早稲田大学図書館所蔵の子弟書は、主に澤田の旧蔵である「風陵文庫」のものである。

子弟書のテキストが現在まで保存されてきたのは、多くの風俗文学研究者や愛好者のおかげである。彼らの旧蔵は今日ではほとんどが公私立の図書館に移管され、中には散逸してしまったものもあるが、我々は彼らの貢献を決して忘れてはならない。

この21日間は、私にとって、慌ただしくも充実し、収穫のある日々であった。

横浜は美しい景色に囲まれ、神奈川の人々は人情味に溢れていた。

※弾詞 中国明代・清代以降現代まで江蘇・浙江を中心に行われる語り物の一種

